

女傑崩壊編 女将軍・遼華

第七章

陷落の宴

数週間後。

遼華が目を覚ました時、最初に感じたのは絹の感触だった。

柔らかい。温かい。身体を包む布団の感触が、遼華の意識をゆっくりと現実に取り戻していく。天井が視界に入る。後宮の天井だった。美しい装飾が施された、豪華な天井。最初にこの天井を見た時、遼華は泣いた。今は——ただ見ている。

手が、首に触れた。

首輪。

黒い革の首輪。指がその表面をなぞる。「鉄血の女宰相、雌犬に墮つ」と刻まれた文字の凹凸が、指先に伝わってくる。遼華はしばらく、その文字をなぞり続けた。

慣れた。

この感触に、慣れてしまった。最初につけられた夜、遼華は泣き続けた。外してくれと懇願した。しかし今は――指がなぞるだけで、何も感じない。それが何を意味するか、遼華にはわかっていた。わかった上で、どうすることもできなかった。

遼華の双眸が、隣を見た。

ルカが寝ていた。

深紅の髪が絹の布団の上に広がっていた。首輪が灯りを鈍く反射している。「紅蓮の女帝、雌犬に墮つ」と刻まれた首

輪が。ルカの寝顔は穏やかだった。苦悶がなかった。抵抗がなかった。ただ静かに、眠っていた。

遼華の手が、ルカの頬に触れた。

温かった。

(……ルカ……)

かつてこの頬に触れた時と同じ温もりだった。しかし全てが違った。二人とも首輪をつけていた。二人とも老王の後宮にいた。老王の精を子宮に受けたまま眠っていた。それでも——この温もりだけは、変わっていなかった。遼華の指が、ルカの頬をゆっくりと撫でた。

ルカの双眸が、ゆっくりと開いた。

琥珀色の瞳が、遼華を見た。焦点があった。最近、ルカの目には焦点が戻ってきていた。情欲に濡れながらも、明晰な光が宿っていた。すべてを理解した上で享樂を選んでいる者の光が。

ルカの唇が、わずかに動いた。

「……遼華……」

か細い声だった。しかし確かな声だった。遼華の名前を、ルカが呼んだ。それだけで——遼華の胸の奥で何かが、じくりと痛んだ。この名前をこの声で呼ばれることが、遼華にはまだ痛みとして届いた。それが嬉しかった。まだ痛めることが。

「……おはよう、ルカ」

二人は見つめ合った。

言葉がなかった。言葉にできないものが、二人の間に横たわっていた。老王の前で晒し合った姿が。互いの秘所を愛撫した夜が。老王の逸物を求めて啼いた声が。それらが全て、二人の間にあった。

しかし今この瞬間、ルカと目が合っていた。

それだけで、十分だった。

扉がノックされた。コンコン、と。

「失礼いたします」

扉が開いた。柳梅香が入ってくる。上質な侍女服を纏い、銀髪を高く結い上げていた。その首には――首輪の痕があった。かつてここにいた証が、皮膚に薄く刻まれていた。

遼華は初めてその痕を見た時、柳梅香に何があったかを理解した。この女も、かつては自分たちと同じ場所にいた。首輪をつけて、老王の雌犬として。それが今は侍女として立っている。その事実が何を意味するか、遼華にはまだわからなかった。

柳梅香の双眸が、二人を見た。落ち着いた目だった。動じない目だった。この後宮で長く生きてきた者の目。

「お目覚めですか」

「はい」

「では、お身体を清めましょう」

柳梅香の手が布団をめくった。遼華とルカ、二人の身体が露わになる。全裸。首輪をつけたまま。柳梅香の双眸が二人の身体を確認するように見た。品定めではなかった。世話をする者の、確認の視線だった。

「昨夜も、老王様に抱かれましたね」

遼華の顔が熱くなった。「……はい……」

昨夜のことを、身体が覚えていた。老王の逸物の感触が、まだ内壁に残っていた。老王の精の熱が、子宮の奥にまだあった。それを柳梅香に指摘されることの羞恥が、遼華の頬を染めた。

「お身体に異常はございませんか」

「大丈夫です」

柳梅香はルカの身体も確認した。「ルカ様も大丈夫ですか」

「……はい……」

「では、湯殿へ」

湯殿は広かった。

大理石の床に、中央には大きな浴槽。湯気が立ち上っていた。温かい湯が浴槽を満たしていた。遼華とルカが湯に浸かると、老王に何度も抱かれた身体の疲れが、ゆつくりと溶けていく感覚があった。

柳梅香は二人の身体を洗い始めた。

遼華の背中を、丁寧に。ルカの髪を、優しく。その手つきは慣れていた。何度もこうしてきた者の手つきだった。

柳梅香の手が、遼華の双丘に触れた。

「んっ……」

洗われているだけだった。しかし遼華の身体は敏感だった。老王に何度も触れられた身体が、触れられることへの感受性を高めていた。柳梅香の手が乳首のそばを通るたびに、遼華の身体がわずかに震えた。快感ではなかった。し

かし快感の予感があった。触れられることへの反応が、もう遼華の意思とは別のところにあった。

柳梅香の手が、遼華の秘所に触れた。

「あっ……」

丁寧に洗われる。昨夜注がれた老王の精が、湯と共に洗い流されていく。遼華はその感覚を感じながら、奇妙な喪失感を覚えた。洗い流されることへの、喪失感。

（……何を……何を考えているの、私は……）

老王の精が洗い流されることに喪失感を覚えている。その自覚が、遼華には恐ろしかった。しかしその恐ろしさも、最初ほど鋭くなかった。慣れていた。自分の変化に、慣れてしまっていた。

柳梅香がルカの身体を洗い始めた。

ルカの双丘を。ルカの秘所を。ルカの身体も、柳梅香の手に反応してわずかに震えた。「んっ……」遼華はそれを横目で見ながら、浴槽の湯に身を沈めていた。

柳梅香の声が、静かに響いた。

「よく調教されましたね、お二人とも」

遼華は答えなかった。

柳梅香の声が続いた。

「私も、かつてはそうでした」

遼華の双眸が、柳梅香を見た。

「老王様の後宮に来た当初は、抵抗しました。しかし今は

――」

柳梅香の手が、ルカの身体を洗い続けながら、言葉を続けた。「今は、侍女として老王様にお仕えしています」

遼華は柳梅香の首の痕を見た。首輪をつけていた跡。その痕が何を経てきたか、遼華には想像できた。いや——想像できた。自分が経てきたものと、同じものを経てきたから。

「しかしお二人は違います」

柳梅香の双眸が、遼華を見た。その目に、同情はなかった。哀れみもなかった。ただ——事実を告げる者の、静かな目だった。

「お二人は、老王様の最も大切な雌犬です」

遼華の胸が、複雑に揺れた。

最も大切な、雌犬。その言葉の二つの部分が、遼華の中で別々の感情を呼んだ。「最も大切な」という部分が、奇妙な温かさを連れてくる。老王に大切にされているという感覚が。「雌犬」という部分が、かつての遼華の誇りを刺す。鉄血の女宰相と呼ばれた遼華の誇りを。

しかしその刺さり方が——もう以前ほど深くなかった。

それが何よりも、恐ろしかった。

柳梅香が二人の身体を拭き終えた後、尻尾を持ってきた。
黒い、尻尾。

「失礼いたします」

柳梅香の手が遼華の臀部に触れた。入り口を解す。そして尻尾が挿入される。遼華の身体が震えた。「あっ……」これも慣れた。慣れてしまったことが、遼華には——もう恐ろしくすらなかった。

ルカにも同じように。「んっ……」

柳梅香は二人を見た。全裸、首輪、尻尾。二匹の雌犬。その姿を、柳梅香は淡々と見ていた。かつて自分も同じ姿をしていたから。

「では、老王様のもとへ」

老王は椅子に座っていた。

書類を読んでいた。この男は政務もこなす。国を動かしながら、後宮を持つ。遼華はかつて敵国の宰相として、この老王と対峙したことがあった。その頃は——遠い話のようだった。別の誰かの話のようだった。

扉がノックされた。「入れ」

柳梅香が先に入り、遼華とルカが続いた。

四つん這いで。首輪を揺らして。尻尾を揺らして。

老王の双眸が書類から二人に向いた。その目が細くなつた。

「おはよう」

「おはようございます、老王様」

二人の声が揃った。遼華は自分の声を聞きながら、これが自分の声かと思った。かつて国政を動かしていた遼華の声が、四つん這いで老王に朝の挨拶をしている。その事実と、今の自分の姿が、遼華の中でまだ時々乖離した。

老王の手が、二人の頭を撫でた。

それから老王の指が、遼華の首輪に触れた。「鉄血の女宰相、雌犬に墮つ」の文字をゆっくりとなぞる。それからルカの首輪に。「紅蓮の女帝、雌犬に墮つ」の文字をなぞる。老王の指がその文字をなぞるたびに、遼華の首が敏感に反応した。首輪越しに老王の指を感じる。それが——嫌ではなかった。

(……嫌では……ない……)

その自覚が、遼華の胸の奥に落ちた。静かに。深く。

老王の声が、響いた。

「今日は、特別なことをする」

「お前たち二人で、互いを慰め合え。ただし——絶頂してはならない」

「お前たちが絶頂できるのは、俺の逸物だけだ。それを、確かめる」

二人の双眸から、涙が溢れた。

「……………はい……………老王様……………」

遼華とルカは向き合った。四つん這いのまま。

ルカの目が遼華を見ていた。情欲に濡れた目で。しかし明晰に。この命令が何を意味するか、ルカもわかっていた。わかった上で、遼華に向き合っていた。

遼華の手が、ルカの頬に触れた。

朝と同じ温もりだった。しかし今は——老王が見ていた。この触れ合いを、老王が見ていた。それが遼華には、朝とは違う感覚を与えた。朝の触れ合いは二人だけのものだった。今は老王の命令の中にある。

遼華の指が、ルカの双丘に触れた。柔らかい。指が乳首に触れる。摘む。転がす。ルカの身体がわずかに震えた。「んっ……………」ルカの手も、遼華の身体に触れてきた。遼華の双丘を。遼華の腰を。

快感はあった。

しかし——積み上がらなかった。

遼華の指がルカの秘所に触れた。濡れていた。わずかに。しかし遼華がいくら愛撫しても、ルカは絶頂に向かわなかった。波が来ない。絶頂の予感が来ない。遼華も同じだった。ルカの指が敏感な場所を刺激しても、快感は来る、しかし絶頂には遠かった。

(……届かない……ルカでは……届かない……)

その事実を、遼華は今また確認していた。

かつてルカの指一つで絶頂した遼華が。かつてルカの声だけで身体が反応した遼華が。今は——ルカの指が内壁を丁寧に刺激しても、絶頂に届かなかった。快感はあった。ルカのこと嫌いになったわけではなかった。しかし身体が、もっと深いものを求めていた。老王の逸物が刻んだ記憶を、身体が忘れられなかった。

涙が溢れた。

ルカも、同じ目をしていた。

遼華を愛撫しながら、届かないことを知っている目。老王の逸物を求める目。情欲に濡れた、しかし明晰な目で、ルカは遼華を見ていた。二人の間に言葉はなかった。しかし同じことを感じていた。同じものを失っていた。同じものに作り変えられていた。

二人の手が、互いを愛撫し続けた。

しかし絶頂しなかった。できなかった。

老王の声が、響いた。

「そうだ」

老王は立ち上がった。衣を脱ぐ。老王の逸物が露わになる。

遼華の秘所が、それを見た瞬間に蜜を溢れさせた。

ルカも同じだった。

二人の身体が、老王の逸物に反応した。ルカの指では届かなかったものが、老王の逸物を見ただけで溢れ出した。遼華はその事実を、今この瞬間も全身で体験していた。見るだけで反応する。老王の逸物を見るだけで、身体が答える。それが何を意味するか——もうわかりきっていた。

「お前たちが絶頂できるのは、これだけだ」

老王の手が、遼華を指した。「まずは、遼華」

遼華は老王に近づいた。四つん這いで。首輪を揺らして。老王の逸物に舌を伸ばした。根元から先端へ。丁寧に。老王の逸物の熱が、舌尖から伝わってくる。男の味が、口に広がる。遼華の秘所が、さらに疼いた。

早く。

早く、老王の逸物が欲しかった。

その感情が自分の中にあることを、遼華は知っていた。知りながら、舌が動いた。

老王は遼華を抱き上げた。ベッドに運ぶ。老王の逸物が遼華の秘所に触れた。入り口に。その瞬間だけで、遼華の秘所がひくりと動いた。求めるように。

侵入した。



「あっ……!!」
「はっ……!!」

ルカの指では届かなかった場所まで、老王の逸物が届いた。内壁が老王の形を受け取る。充実感が全身に広がる。子宮口に到達した瞬間、遼華の背が反った。

(……いっぱい……老王様の逸物で……いっぱい……)

老王の腰が動き始めた。

「あっ………！ あっ………！ はっ………！」